

関学大に手話研究拠点

関西学院大(西宮市)は「手話言語研究センター」を開設し、今年度から新たな研究や教育を始めた。手話の表現方法だけでなく、成り立ちや歴史、文化的背景などを掘り下げて考え、耳の不自由な人への理解を深めていく。手話を専門に扱う研究機関は全国的にも珍しいという。

(梅本寛之)

社会的理解 広く深く

同センターは、人間福祉学部や国際学部などの教員のほか、手話通訳者ら10人で構成。手話の文法構造や歴史のほか、耳の不自由な人のいる家庭での手話の使われ方などについて研究する。今後、研究成果を発表する場も設けていくという。

同センターによると、日本では、手話言語の研究に力を入れる大学はほとんどなく、関学大でも基本的な手話を学べる講義があるだけだった。一方、海外では研究が進んでいるところ

の講義も週1回実施。手話研究と並行して学生向けの研究と並行して学生向け

における単語の成り立ちや文法構造を解説するほか、会話する時に必ず相手の目の前に立つといったマナーや、手話を使う人たちの間での文化について学ぶ時間もある。小中学校の教諭や一般の人に向けた学外での手話講座も予定している。

センター長を務める山本雅代・国際学部教授は「専門の研究者を増やし、講義内容も充実させていくことで、関学から共生社会の実現につなげたい」と意気込み、講義を聴講している人間福祉学部4年の酒井唯さん(21)は「手話は単なるコミュニケーション手段でなく、奥の深いものだと感じるようになった」と話していた。

同センターは19日に、ヒルトン大阪(大阪市北区)で設立記念シンポジウムを開催する。手話を言語と位置づけて普及を目指す条例のある明石市の市議が、条例の意義などについて説明する講演が予定されている。

文法構造や歴史 成果発表も



授業後に学生(左2人)と手話で会話するセンターの専門技術員たち(西宮市で)